

心を尽くし 主に信頼して歩む

箴言3章5～12節
2023年8月20日
松田 基子 師

一般的に旧約聖書は、難しいと思われていますが、その中で箴言は、信仰を抜きにして、特に人生訓を求める人々からは、

『これならためになる』

と親しまれている書です。親しまれる理由は、誰もが経験する、実生活から生み出された問題を取り扱っているからです。教訓的な意味を込めて、比喻や譬え(たとえ)にした金言、格言が集められています。イスラエルに於いては、賢者や知恵の教師と呼ばれる人々が箴言を語って、人々を特に、若者を導きました。ただ、知恵の言葉は、イスラエル固有のものではありません。イスラエルは、メソポタミヤとエジプトの中継地点にありますから、イスラエルの知恵の教師も、メソポタミヤやエジプトからの影響を受けています。

しかし、そこに決定的な違いがあります。それは、**イスラエルに於いては、全ては天地万物の、そして、人間の創造主である神様の導きと支配の下にある**と言う事が、**大前提**なのです。しかし、イスラエル人にとって世界との交流が広がって行くに連れ、その考えを核として動かず、世界の情勢に振り回される事無く、生きて行くと言う事は、大変な事でありました。イスラエルの歴史を振り返りますと、彼らの歴史は、前587年に、イスラエルの残りの民、ユダ王国も、バビロニアに滅ぼされ、国の要人達、技術者や、能力ある者は、バビロンに捕囚として連れて行かれました。

元々当時のユダ王国は、親エジプト派でしたから、エジプトにも、沢山の人が逃れて行きました。ユダヤ人は捕囚を機に、バビロン、エジプト、地中海世界に、ディアスポラと呼ばれる、離散の民となって行きました。

「旧約聖書が分かる本」

(並木浩一、奥泉光 対話:河出新書 2022年 P70)
によりますと、

「ユダヤ人の大部分はバビロニア支配時代以降、【離散の民】になっている。しかし民族のアイデンティティーを失わない形で、なお生存し続けている。古代以来、国家領域を失い、つまり、ホームグラウンドを失って、宗教の中心的なシンボル(神殿)も破壊され、その上、離散しても、アイデンティティーを保った民族は、ユダヤ人しかいない。奇跡的なんです。」

「彼らがアイデンティティーを維持し得たのはなぜか、エルサレムに、礼拝と祭儀の為の神殿を造ったこと、聖書(正典)を制定し、律法を各時代に当てはまる様に解釈し、その法規に従って生きたからです」

と記されています。

この律法を各時代に当てはまるように解釈し、その法規に従って生きる様に指導した人達、箴言を編集した知恵の教師達も、その務めを担いました。時代はペルシャから、ギリシャ、ヘレニズム時代に、大きく変わっていきました。世界統一化を目指し、国や民族の壁を除いて、平等意識を持たせました。コイナーギリシャ語を公用語とする言語の統一化が、計られました。ギリシャ文化と、オリエント文化の融合による、天文学、数学、生物学、医学、地理学、文献学などの諸科学が盛んになりました。しかし、学問、文化の融合は、ギリシャ宗教と、東洋の諸宗教との混淆(こんこう)が起きました。

ユダヤ人達は、そう言う世界の価値観の中で、創造主である神様への信仰を、守って行かなければなりません。そこに現実問題として律法の範囲を越えた問題に対して、具体的にどう対処すれば良いのか、一般の信仰者には判断が難しくなり、導いてくれる指導者が必要でした。その務めを担ったのが、知恵の教師達でした。彼らはその為に箴言を編集しました。箴言の冒頭には、「**イスラエルの王、ダビデの子、ソロモンの箴言**」と記されていますが、ソロモンは知恵の代表とされているところから、彼の名を冠しているのです。

ソロモンが残した言葉もあるとされていますが、

ペルシャ時代から、前300年代に、知恵の教師達によって編集されたと言われています。箴言の主題は、1章の7節の言葉です。

「主を畏れることは知恵の初め。

無知な者は知恵をも諭しをも侮る」

とあります。人間にとって知るべき一番大切な事は、何でしょうか。それは、

『自分の命の与え主を知り、自分は何のためにこの世に生まれて来たのか。自分の造り主の御心を悟って、人生を歩み抜き、造り主の御許に帰って行くことです。』

主を畏れると言う意味は、

『神様に信頼して、神様に聴き従う』

と言う意味で、

『神様への信仰』

と言い換える事ができます。知恵の教師は人間の最も大切な事として、

『主を畏れること、つまり、自分の造り主であり、天地万物を造り、支配しておられる神様に信じ、信頼し、従う事こそ、最も大切な知恵の土台だ』

と教えています。反対に

「無知な者は知恵をも諭しをも侮る」

とあります。ここで言われている無知な者とは、

『知力が足りない』

と言っているわけではありません。知恵の教師が教えようとしている、創造主に従う命の道を知ろうとせず、高慢で教師や、親の助言、忠告に耳を傾けることをせず、自分の考え、気分の儘(まま)に歩んで、人生を軽んじることです。

『そうならないように箴言に耳を傾けなさい』

と言っているのです。

そこで、今朝の聖書箇所3章5節から12節を見て参りましょう。3章5節には、

「心を尽くして、主に信頼し、自分の分別には頼らず、常に主を覚えてあなたの道を歩け。そうすれば、主はあなたの道筋をまっすぐにしてくださる」

と勧められています。

「心を尽くして、主に信頼する」

とは、

『命を賭けて、神様を愛して行く』

と言うことです。つまりは、

『生も死も、神様にお献げし、委ねて生きる』

事です。わたし達キリスト者は、神様を信じた時、

「神は、その独り子をお与えになったほどに世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」 (ヨハネ3:16)

この御言葉を信じて、

『イエス・キリストが神様に叛いた私の罪を引き受けて、私の罪の身代わりに十字架に架かって下さった。イエス様は十字架に苦しみ、死んでまで、私の罪を贖い、私の全存在を救って下さった。だからもう、私の命も人生も、神様にお委ねして、御心の儘に使っていただきたい。』
そう決心したものです。

しかし、現実の生活はどうでしょうか。常に自己中心的な自我との戦いです。わたし達は色々な理由を付けて、やはり自分を優先させてしまいます。そんな私達に、神様に、全信頼するとは、どう言う事かを教えてくれた人がいます。1924年の第8回パリオリンピックで起こった実話を、映画化したものです。【炎のランナー】と言う、映画があります。

二人の青年ランナーを中心に描かれています。一人は裕福な銀行家の息子の、エイブラハムズ・ハロルド青年です。彼はユダヤ人としての差別を受けた事から、自分の得意とする陸上で、ユダヤ人の誇りの為に、世界一のランナーを目指します。今一人は、スコットランド長老派の宣教師を父に持ち、父の宣教地、中国で生まれ、自身もその道を歩もうと、志を抱いたエリック・ニデル青年です。彼は走ることが大好きで、走る時は神の喜びを感じると言い、走る事は、神様からの恵みで、走る事に寄って神の御名を広めたいと願っていました。

二人はロンドンの大会で対決します。結果は、神様の喜びに溢れて走るエリックが優勝しました。敗れたハロルドはコーチを雇い技術を磨き、二人はオリンピック選手に選ばれ、他の選手達と共にパリに向かいます。ところで、エリックが出

場予定の100mの予選は、日曜日に行われる事が分かりました。 エリックは、日曜日は、神様を礼拝するための日である事を伝えて、出場を辞退しました。 上層部は、

「国王の為、国家のための忠誠を果さないのか」と圧力を掛けましたが、エリックは、

「神様を崇めたい」と言って固辞しました。 他の選手達は何とかしてエリックをオリンピックで走らせたいと考えた結果、400mに出場出来るようになりました。 エリックは400mに出場し、見事金メダルに輝いたのでした。

私は以前、ここまでの話を聞いていました。 その時は、

『ああ、神様を第一にして行けば神様は必ず、その人を、栄光に輝かせてくださるのだな・・・』と思いました。 そして、主が、
『あなたの道筋を真っ直ぐにして下さるとは、そう言う事なのだ』と、
思いました。 でも、どうも心に納得がいきません。
『キリスト信仰の故に、迫害に遭った人々は、最も神様に信頼し、神様に従った人々ではなかったのでしょうか。 それなのに迫害に遭いました。』

神様がその人の人生の道筋を真っ直ぐにしてくださいと言われる、

『真っ直ぐは、人間の栄光ではないのではないだろうか』

と思えてきました。

そう考えていると

【炎のランナー】

のエリック・ニデルには、

【最後のランナー】

という続きがあると言うことが分かりました。 エリックはその後、宣教師となって自分が生まれた中国の天津に行って、福音を伝えると共に、貧しい子供達に、科学や英語を教えて、走る喜びを与えます。 その様な中、日本軍が、1937年に、天津を占領します。 エリック・ニデル宣教師は、妻子をカナダに避難させて、自分は天津に残り、人道支援を続けます。 やがて日本軍に捕らえられ、収容所に入れ

られます。 そこでの過酷な扱いに、体調を崩しますが、走ることで皆を励まします。

収容所の所長が、エリックが金メダリストであることを知ると、競争を求めます。 その為にエリックに食糧を与えるのですが、彼は、それを子供達に与えました。 当日、エリックは空腹の為に、レースに負けてしまいました。 子供たちに食糧を与えたエリックに腹を立てた所長は、エリックを穴倉に閉じ込めます。 エリックを庇った人も、隣の穴倉に放り込まれます。 仲間が隙をみて、食事を持ってくると、エリックは隣の人に先にやるようにと言うのです。 やがて 穴倉から出されるのですが、収容所での過酷な生活は続きます。

その様な中、病人の為に薬が必要になりました。 エリックは薬を外部から持って来させる許可を得るために、所長にレースを申し入れるのです。 やせ細って空腹のエリックには、とても勝ち目はありませんでした。 ところが、エリックが勝ったのです。 所長は負けた悔しさに、卑劣な方法で約束を破りました。 エリックはそんな逆境のなかで、周りの苦しむ人達を助け、イエス様の愛を与えて、闇の世界に光を与えました。 彼によって周りの怒りや、憎しみが鎮められ、希望を抱く事が出来ました。 そんなエリックなのに・・・、エリック・ニデル宣教師は、1945年戦争が終わる数ヶ月前に、召されて行ったのでした。

人間的に見るなら、

「神様をこれ程愛し、これ程信頼し、これ程委ね切り、これ程献げきった人はいませんのに、

『これが、神様・・・、あなたが
真っ直ぐにされた道なのですか』

と問いたくなるのではないのでしょうか」

ここで、私達が、はっきりと知らなければ成らない事は、人間にとっての真っ直ぐな道と、神様が導かれる真っ直ぐな道とは違うと言うことです。

ところでユダヤ人達は、外国に散らされて行って、複雑な世界、複雑な社会ルール、違った価値観の

中に生きて行かなければならなくなった時に、
律法の言う、

「そうすれば、祝福される」

とはならない、悪の力と戦い、信仰を貫いて苦難を受け
る場合も出て来ました。そこで知恵の教師は、

『そうすれば～そうすれば』

と律法の社会を語った上で、そうならない時、
11節に、

「我が子よ、主の論しを拒むな。主の懲らしめ
を避けるな。かわいい息子を懲らしめる父の
ように、主は愛する者を懲らしめられる」

と教えました。この言葉は、新約聖書の、ヘブライ
人への手紙、12章4節以下に引用されています。

ヘブライ人への手紙は、紀元一世紀後半のキリスト
教迫害を受けながら、信仰に生きる人々に、

『迫害や試練に遭うことで、信仰を捨てない

様に、イエス・キリストを仰いで天国まで走ろう』

と勧めています。

神様は唯、見守っておられるだけではありません。
既にイエス様を人類の贖い主として、十字架に架
けて、復活させ、罪との戦いに勝利させておられま
す。神様は、そのイエス様を試練の時に、私たち
と共に傷み、苦しみ、戦い抜く守り手として遣わし
て下さっているのです。あのエリックもイエス様の
愛が、何時も注がれ、イエス様が共に居られたから、
悪と戦い、キリストの愛を現す事が出来たのです。

人生の目的は、

『真の神様を知り、その神様に、心を尽くして、
全信頼し、自分の全生涯、全存在を、このお方
に賭けて行くこと』です。それは、

「たとえ、そうでなくても」

と言う信仰です。

『試練をも、神様の御心を信じて、歩み抜く』

のです。

『それが、主が与えて下さる、神の子とされた
御国への真っ直ぐな道です。』

信仰は生ける神様との関係です。聖書の言葉
は、字面を受け取るではありません。

パウロは、コリント第Ⅱの手紙の3章6節で、

「文字は人を殺しますが、霊は生かします」
と言っています。聖書の御言葉から神様の愛の
御心、イエス・キリストの愛の御心を受け取るの
です。そして、その愛に対して全身全霊を以て、
答えて生きるのです。

それは、自分の力で出来るものではありません。
イエス様が愛を注ぎ、聖霊が導いて下さいます。
ですから、私達も、心を尽くし、神様に全信頼して、
地上の旅路を歩み抜き、天の御国を目指して、
真っ直ぐに歩ませて頂きましょう。

お祈りを致します

憐れみ深い天の父なる神様

あなた様は、私達を罪の滅びから救い出し、永遠
の命を与えるために、御子イエス・キリストを十字架
に架けてまで、御救いを与えて下さいました。

その御愛は、人生のどんな苦しみも包み込むも
のです。その御愛をもって、私たちにも人生の旅
路をご自身に全信頼して、イエス・キリストを仰いで、
神様の真っ直ぐな道を歩み、御許に帰って来る
ようにと、導き続けて下さっています。

どうか弱い私達を助けて下さい。

どんな時も共にいて下さるイエス様に縋り、
御国への真っ直ぐな道を歩ませて下さい。

救い主イエス・キリストの聖名によって
お祈りをいたします。

アーメン。